ホタルのニュースレター
日本ホタルの会 2020/7 第 86 号

追悼特集号

日本ホタルの会の元常任理事の大場信義先生におかれましては，2020 年（令和 2 年）1 月 31 日に 74 歳の生涯を閉じられました。ここに，先生の本会の発足と発展にご尽力されたご功績を偲び，生前のご貢献に対して心から感謝申し上げますとともに，本号を追悼特集と致しました。

（右の写真は奥様よりご提供して頂きました。）

ホタルの光のように
－大場信義氏追悼特集に寄せて－

日本ホタルの会 会長　本多 和彦

今年も，桜の季節，若葉の季節が過ぎ，早やホタルの季節も過ぎていこうとしています。ホタルは，私たちに安らぎや豊かさを届けてくれる，日本人の心に響く生物の一つです。このホタルの研究に生涯を費やした大場信義氏が，今年１月に逝去されました。私も，40 年近くにわたりご指導をいただいてきた一人ですが，２月上旬，訃報を聞いた時には，あまりに突然のことで，思考が止まってしまったことを思い出します。昨年の夏前くらいから体力が落ちて，

活動を抑制されているということは聞いていましたが，電話で話す声もお元気で，年齢的にもまだまだ，何らかの形で私たちに多くのことを残していただけたはずだったと思うと，残念でなりません。ホタルのように光り輝き，ホタルの光がすっと消えるようにいなくなってしまわれた，そう思うと，大場さんらしいのかもしれないとも思います。大場さんは，ホタルという分野の第一人者で，世界を舞台に活躍されていたにもかかわらず，偉ぶることなく，どんな稚拙な疑問にも真摯に応えてくださいました。穏やかな人柄とともに，ホタルやそれを取り巻く自然，そしてその自然やホタルを愛する人々に向ける優しいまなざしが忘れられません。

私は，37 年前下水処理場で水質管理を担当しているときに，大場さんと知り合いました。公共下水道は，海や川の水質を改善する切り札として期待され，排水の浄化はその役割を果たすと思っていましたが，一方で，水質が改善されても，生物のすみかとなる川が，コンクリートで固めた三面張りに変わっていくことにさみしさも感じていました。その時に，当時ではまだ少なかった生物配慮型の護岸改修に大場さんがアドバイザーとして関わっていることを知り，お手伝いさせていただくことになりました。大場さんは，自然は，できるだけそのまま残したいが，くらしの安全を守り，豊かさを求めるため，やむなく自然を改変することにも理解を示し，改変を最小限にとどめ，自然と共存できる道を求める柔軟な考えをお持ちで，この教えは，私にとって大きな示唆となっています。横須賀での大場さんの足跡の一部を紹介すると，生物配慮型の護岸改修では，岩戸川や西逸見ホタルの里など，開発のミチゲーション事例では，横須賀リサーチパークの水辺公園，人工水系でのホタル飼育ではソレイユの丘，そして里山の自然を守り，復元したものとして，野比地区かがみ田谷戸の再生などがあります。このほかにもまだまだたくさんの事例がありますが，改めて並べてみると，人工的に造られた環境から谷戸田のような三浦半島の原風景といえる自然環境まで，幅広く対応されていることに気づきます。生物の知識だけではなく，それを育む環境への理解の深さに驚かされます。大場さんが手がけたこれらの環境は，それぞれホタルの名所として，豊かな自然に触れられる貴重な場所として人々に親しまれています。こうした活躍の背景には，生物だけを見るのではなく，生物を育む環境の重要性を考える視点があったためと思います。こうした視点を組織として発信していこうと発案されたものが，日本ホタルの会です。1970 年代以降，多くのホタル保全活動が全国に展開されていましたが，大場さんをはじめとする当会の発起人たちは，ホタル

ではなく，ホタルが生息する環境こそが人間にとって掛け替えのないものと捉え，ホタルをシンボルとした身近な自然の保全・再生を目指すという理念を導きました。これは，今の言葉でいう「生物多様性の保全」につながるものと考えています。そして，ここには，大場さんが，世界中のホタルを研究し，横須賀をはじめ，全国各地で経験した保全・再生活動を通して求め続けた，豊かで美しい日本の自然の未来への継承の思いが込められています。

日本ホタルの会は，1992 年の発足以来，この理念のもと活動を続けてきていますが，未だに小さな力でしかありません。それでもこれまでは大場さんという大きな存在が，全国の自然環境保全活動に，「ホタルだけではない，ホタルが住む自然・環境の保全こそが大切だ」という教えを残し，多くの共感を得て来たと思います。その人が，いなくなってしまったこれから，日本ホタルの会は，大場さんが提唱した，ホタルをシンボルとする身近な自然の保全・再生，そして生物多様性保全をより一層発信し続けて行きたい思います。

結びに，大場信義氏の功績をたたえ，私たちへの温かい教えに感謝するとともに，心よりご冥福をお祈りいたします。

大場さんとの出会い

日本ホタルの会 名誉会長　矢島 稔

大場さんが亡くなったことは，奥様から手紙を頂いて知りました。74 歳は近頃では若く，未だやり残したことがいくつもあったに違いありません。人ごとではありませんが，私はこの 7 月で満 90 歳になりますから 10 数歳下だったわけです。では，今日までの大場さんの思い出，日本ホタルの会との関わりについて，私の印象を述べたいと思います。

日本は，長い間戦争の毎日で，それが私共の世代は生まれてから当り前でしたから，この点は大場さんとは少し違うようです。戦争中は幼児でも捕虫網をもってセミやトンボを採れませんでした。つまりこの 10 数年の違いが物の考え方に大きな違いが出来，特に生きものの見方を少し変えていたようです。昭和 20 年から 40 年に日本は特に少年少女の時代が全く変って，年が少し上の私たちとは考え方，見方が違っていた事がいくつもありました。例えば「生態

学」を大学で習い始め，生物の存在を支える環境に目を向け，これらを知らないと生物を知ったことにはならないという発想は少し後になってからでした。

ところで日本には「ホタル」という名著が昭和 10 年に丸善から出版され，この中で初めてゲンジボタルの幼虫は小川の中に生活し，カワニナという巻貝をとらえて食べて成長すると発表されました。私はこの本を終戦直後神保町で見つけ，すぐに買い，これで勉強しました。著者の神田左京さんは長崎で生まれ育ち，なんでも自分の目で確かめないと承知しない少し変った人でした。それまで，多くの日本人は「シジミ変じて蛍になる」と信じ，実際に現場で確かめようとした人はいなかったわけです。これは中国の本草学の丸写しで，著者はおかしいと思って現場で確かめカワニナとつき止めたわけです。何とこの件は発行された昭和 10 年の 2 年前のことで，長い間日本人はほとんどシジミと思っていたわけです。ほとんど同じ場所に住んでいる貝ですが，片方は巻貝で，いつだれが間違えたのかは別として，サイエンスのほとんどを古代中国のものこそ本物と信じ，何百年もの長い間信じられてきたことを日本人の一人が疑い，昭和になってから確かめたという話は驚きです。つまり，このころから日本人は実物を良く調べ，日本らしいサイエンスの目を育んできたわけです。

大場さんの名を目にしたのは，彼が書いたものを読んだ時です。蛍の全体についてまるで覚え書きのように独特な文体で，すっきりしていました。少し後になって分かってきたのは，大場さんは東京理科大学を出，発光に関する生理学を専攻し，そのためホタルを材料にした人で，我々「蛍屋」とは入り口が違ったわけです。後年ＮＨＫテレビで外国産ホタルが一本の木に沢山集まり，上から下まで，まるでそこに指揮者がいるように発光するいろいろなパターンを解説していましたが，正直人間にはその仕組みは分かりませんので，大場さんはくやしかったでしょう。これは今でも誰も説明できませんが，ホタルが発光し，それを目にした個体がすぐに光る反応を持っていて，この仕組みは誰もやっていませんでした。

ところで，私は当時農工大の教授をしていた日高敏隆さんから「日本ホタルの会」をつくってホタルの研究者を増やし，各地にいる研究者同士の考えを発表しあい，互いに観察したことを具体的に発表した方が，より深くホタルを知ることになるという提案を受けました。この提案を受け，次に日高さんと会った時，日高さんの隣にいて紹介されたのが大場さんであったのを覚えています。私は，はじめて会いました。その時日高さんは，財団法人を創る用意をし，

東大の先輩である岡田先生に頼んでリーダーの一人になって頂き，学会形式を造り，東京だけではなく名古屋，北九州など各都市をまわって各地にいる研究者に声をかけ，ホタルの会準備室のような形で動き出したのです。ところが，場所を借りたり主なスタッフに進行を任せたのですが，やはり全国組織になるには相当なお金が必要になり，結局，予算が足りなくなって，この財団化という計画は途中で中止となりました。しかし，すべてを捨てることは出来ず，事務局は事務局として渋谷に残し，次に京王線の代田橋駅の近くにあるビルの中に，会議のできる所を借りて継続いたしました。この全国対象に動き出した後，日高さんが忙しくなって会長を私に譲りたいという申し出があり，資金も私の方で相当な額を捻出して支えました。日高会長が出られなくなったのは，後になって，文部省にも顔が広いために各県に県立大学を造れる制度を頼まれ，その最初の施設ができたことによると分かりました。後に，日高さんは，大きな勲章をもらい亡くなりました。そして大場さんも体調を崩し，出席がほとんどできなくなりました。はじめは戻って来てくれるだろうと期待しましたが，代田橋の事務所に姿を見せることができないまま，この会から去ることになりました。

私は日高さんから会長を頼まれて引き受けざるを得ない立場で，収入がないので私財を出して会を支え会議は続けました。私は 300 万円以上出しました。ところが，次は私にどうしても頼みたいという知事が現れました。それが群馬県で，私が多摩動物公園に造った昆虫館を群馬に造ってほしいという話で，これは私としても考えていなかったことで夢のような話でした。やがて群馬県のプランを現地で知らせる会合があり，私の考えた昆虫館の巨大な建物とフィールドをかつてのような雑木林を多くし，昆虫の住みかとするために全域がアズマネザサに埋め尽くされている所から，この４ｍ以上も伸びているササを地元の人にすべて刈ってもらうことを頼みました。こうなるとホタルの会の理事会をその合間にやるわけにはいきません。そこで理事会を開き，私の件を説明しながらこの会の役員を決め，その方々に後を任せなければなりません。実はそれまでの理事会の出席率が良く，自分の意見をはっきり述べる人が二人いました。それが，現在まで続けて，支えてくれている本多会長と鈴木副会長の二人です。二人とも大場さんとも深い関わりを持っていて，二人を中心にニュースレター第 85 号まで続いてきたことはうれしい限りです。

ところで今群馬県桐生市の「昆虫の森」は，用地が 45,000 ㎡あり，周囲は里山です。駐車場も 300 台あり，最近は東京などの周辺から車で来てくれる人

も多くなりました。6月になるとオオムラサキ，カブトムシ，クワガタそして夜にはゲンジボタルも飛びかいます。すべて係員が卵をかえし，幼虫も育てて，とばす方法でどんどん増えていて，今は月ごとにテーマを決めてあらゆる昆虫を紹介し，何と年間10万人以上の入園者があります。今，日本には23の昆虫館があり，展示や子供たちの発表会もあって，私の夢は現実のものとなりました。日本ホタルの会会員の皆様も，機会があったらお出でください。大場さんにも今の昆虫の森の姿をぜひ見てほしかったと思います。

大場信義先生を偲んで

日本ホタルの会 副会長　鈴木 浩文

日本ホタルの会の元常任理事の大場信義先生におかれましては，2020年（令和2年）1月31日に74歳の生涯を閉じられました。ここに，先生の本会の発足と発展にご尽力されたご功績を偲び，生前のご貢献に対して心から感謝申し上げます。

ご経歴

先生は1945年（昭和20年）神奈川県鎌倉市のお生まれで，東京理科大学理学部化学科をご卒業後，東レ株式会社の基礎研究所に就職されました。その後，横須賀市立鴨居中学校教諭を経て，1975年（昭和50年）より横須賀市博物館の学芸員として勤務され，2006年（平成18年）に定年退官を迎えられます（写真１）。その後は，大場蛍研究所所長，横須賀市長井海の手公園ソレイユの丘ホタル館顧問，産業総合研究所客員研究員，中国科学院昆明動物研究所客員教授，神奈川大学総合理学研究所客員教授などを務められました。

ご研究

ホタルの研究においては，1983年（昭和58年）に京都大学から「日本産ホタルのコミュニケーション・システムの研究」という研究成果に対して理学博士の学位が授与されました。学位審査の主査は日高敏隆先生で，本会の初代会長になります。その成果は，1986年（昭和61年）に東海大学出版会から「ホ

写真1．退官記念講演，横須賀市博物館，2006 年 3 月

（左から小江会員，大場先生，川村理事，鈴木，本多会長）

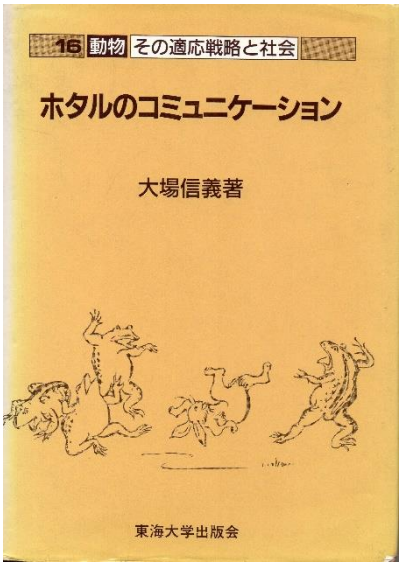


写真2．ホタルのコミュニケーション

（東海大学出版会，1986 年出版）

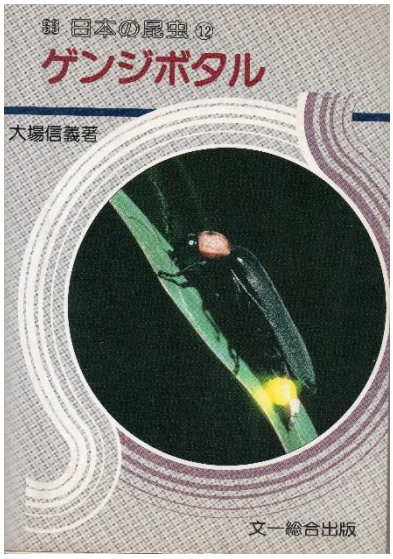


写真3．ゲンジボタル

（文一総合出版，1988 年出版）

タルのコニュニケーション」（動物　その適応戦略と社会シリーズ第 16 巻）として出版されました。この著作によって，日本産ホタルの種類と生態の全貌が明らかとなりました。特に沖縄・南西諸島のホタルについての新たな知見が追加されました。また，ホタルのコミュニケーションのシステムが６つに特徴付けられました。引き続き，1988 年（昭和 63 年）には，文一総合出版から「ゲンジボタル」（日本の昆虫⑫）が出版されました。ここには，ゲンジボタルに関する研究史，形態，生態，生息環境，飼育方法，人間との関わりなどが網羅的に記述されています。更に，関東・関西におけるゲンジボタル雄の探雌飛翔時における集団同時明滅とその発光間隔の違い，およびその境界が中部山岳地帯であることが記されています。他にも論文や著作はたくさんありますが，この２冊は，ホタル研究のバイブルとなっています。

先生と日本ホタルの会

日本ホタルの会は 1992 年(平成 4 年)に任意団体としてスタートしました。大場先生は理事(後に常任理事)として加わりますが,会の発足に当たっては,設立発起人のひとりとして,行政機関や企業に対して,ホタルが棲めるような身近な自然を保全・再生することの大切さを伝えるパイプ役としてご尽力されました。そして，関係省庁や行政，企業，市民団体の方々を迎えて第一回のシンポジウム「ホタルを通して身近な自然環境を考える」を東京の経団連ホールで開催することができました（写真４）。

写真4. 第１回日本ホタルの会シンポジウムで講演中の大場先生

（東京　経団連ホール，1992 年 10 月）

会としては，生態調査や環境コンサルティングなど様々な事業も請け負ってきましたが，先生が中心的となって対応してきました。特に，豊橋市の商工会議所が設立した「朝倉川育水フォーラム」から委託された「朝倉川の流域ビジョンの策定」については，当会のスタッフと共に現地調査を行い，報告書を作成しました。その内容は，朝倉川で実践されています。また，山梨県下部町（現身延町）のホタルドーム建設に当たっては，日本ホタルの会監修として，先生の構想で展示内容が構成されています（写真５）。

その後，先生は大病を患われたこともあり，1998 年（平成 10 年）12 月で会の役員を退かれました。

写真5. 山梨県下部町（現身延町）のホタルドーム

（日本ホタルの会監修，1997 年 6 月撮影）

先生と私

私が先生と初めてお会いしたのは 1988 年か 1989 年（昭和 63 年か平成元年）の夏の頃と思います。「ゲンジボタル」を読んで，横須賀博物館に電話をしました。私は，卒論と修論で，アイソザイム（酵素の分子多型）を用いてウニ類の種間・集団間の違いを解析していました。この手法をゲンジボタルの発光間隔が異なる関東型と関西型の解析にも使えるのではないかと考えたからでした。先生は，電話での初めての面会の申し出にも関わらず，快く対応してくれました。そして，横須賀博物館附属施設の馬堀教育園を訪れました。ちょうどその日，信州大学 4 年生の佐藤安志さん（現農林水産省 農業・食品産業技術

総合研究機構 果樹茶業研究部門 茶病害虫ユニット長）も，同じような内容で訪れていました。ここから，我々の共同研究が始まりました。ゲンジボタル，ヒメボタル，ヘイケボタルなどの地域間の遺伝的な違いや日本産のホタル類の系統関係に関する知見を発表してきました。これらの研究により，私は博士（理学）の学位を取得することができました。その審査に当たっては，大場先生に副査を務めて頂きました。

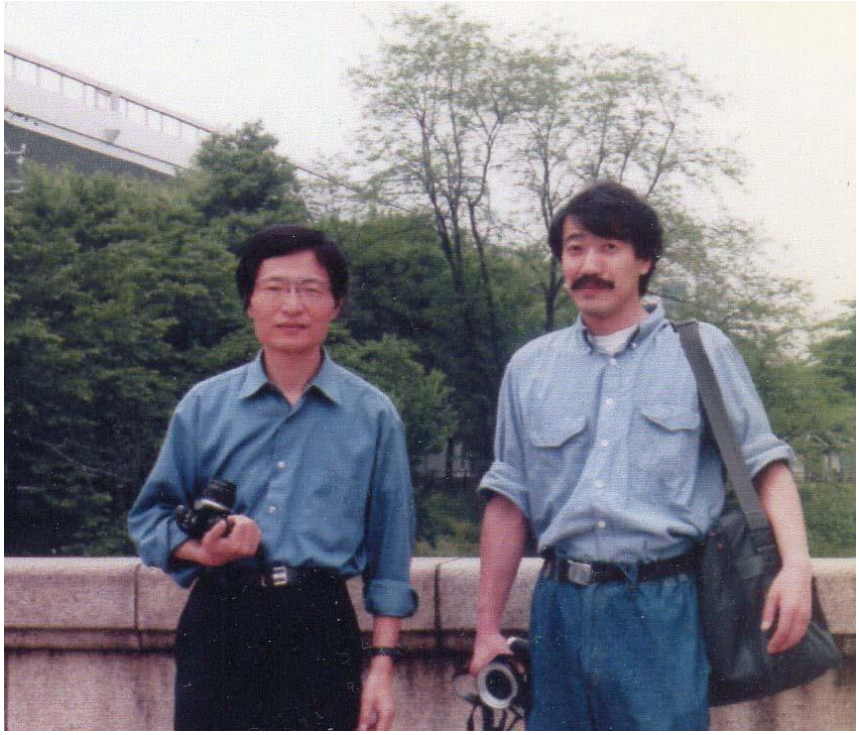


写真6．名古屋城外堀での調査
（写真左上の高架橋の夜間照明がヒメボタルの行動に及ぼす影響の調査，
大場先生（右）と鈴木（左），1996 年 5 月）

また，全国各地でのホタル調査にも同行させて頂きました。沖縄・南西諸島と周辺の離島，名古屋城の外堀（写真６），茅野の別荘（ホタルと天体観測），熊本の旭志村（現菊池市），全国ホタル研究大会での観察会など，たくさんあります。本号で他の方々からも色々なエピソードが語られていると思いますが，特に，西表島の西表野生生物保護センターでは，ちょうど開所時に訪問し，最初の宿泊施設利用者となりました。その際の大場先生の講演の後に，地元の

方からの質問で，火の玉に遭遇した話など発光に関わる不思議な体験談となり，皆さんが困惑してしまったことを覚えています。

海外においてもご活躍された先生ですが，日本ホタルの会にも，かつて先生の関係で，外国会員がおりました。今後の日本ホタルの会の発展を願いつつ，先生のご冥福をお祈り申し上げます。

大場さんを偲んで　調査行の思い出

螢文化誌研究家　後藤 好正

奥様から，大場さんが亡くなられたとの御連絡をいただいたのは 3 月の末のことであった。近年はお会いすることがなかったが，体調が良くないようだという話は聞いていた。まだまだ，研究を進めていただきたかったとの思いでいっぱいである。

日本ホタルの会から追悼文を書く機会を与えていただいたので，大場さんに同行したホタルの調査での思い出を記してみたい。

私が初めて調査をご一緒させていただいたのは，1984 年の名古屋城外堀のヒメボタル調査であった。その年の暮れ，沖縄の調査に同行させていただいた。目的は 1981 年に発見された雌のホタルの正体を明らかにすることであった。大場さんは，当時雌が未発見のヒゲボタルではないかと推測されていて，それを確認しようというのである。沖縄本島では雌も発見できず，石垣島では雌は見つかったものの雄は確認できず，最後の調査地西表島に渡った。西表島では雌の大発生に出会うことができた。これほどの数の雌は以降の調査で見ることはなく，今でもその時の光景を思い出す。しかし不思議なことに，これだけの雌がいるにもかかわらず，雄の姿はまったく見えなかったのである。明日は帰るという最後の夜，雌の写真を撮ろうとファインダーを覗いていると，雌の光がチラチラと揺らめいた。直感的に「雄だ」と確信して懐中電灯を当てると，雌にまっ黒なこれまで見たことのない虫がいた。これがイリオモテボタルの雄の発見であった。

1993 年に日本で 3 例目の水生ホタルとなるクメジマボタルの発見は，関係者を大いに驚かせた。クメジマボタルの成虫調査に久米島向かったのは翌年の初夏のことであった。調査二日目には終夜観察を行ったが，ゲンジボタルと同じ習性を予想していた我々は，ここで予期せぬ光景に出くわすことになった。夜明け近く，雄の飛翔個体が減り始めてようやく調査の終わりが見えてきた頃，雄と入れ替わるように，今度は雌が連続光を放って飛び始めたのである。雌はみるみる数を増やしていき，あっというまに川の上を光が埋めていった。あっけにとられたこの光景は空が白み始め，雌が川の中や岸の岩のコケに次々と集つまって終わりを告げた。雌のこの驚きの習性により以後，夕方から夜中まで雄の調査，宿に帰り 2 時間ほど寝ると次は明け方の雌の調査，宿に戻って朝食をとると 2 時間ほど寝て今度は生息地の環境調査や昼行性ホタルの調査，また 2 時間ほど寝ると夕方からの雄の調査というサイクルになり，調査期間中は終始眠気との戦いであったことも懐かしい思い出である。この調査地では上流の貯水池の工事により赤土が川に流れ込んでホタルが激減し，これほどの雌の集団群飛も翌年から見ることができなくなってしまったのは残念である。

大場さんとの調査の思い出は，イリオモテボタルの発見や，クメジマボタルの雌の大群飛に遭遇する等の幸運なことばかりではなかった。対馬でのツシマヒメボタルの調査行も忘れられない思い出である。調査自体は滞りなく終わったが，最後の調査が終わってＴＶのニュースを見ると，航空会社のストライキ情報が報道されていた。大手航空会社の妥結を報じる一方，中小航空会社はストが行われるという。翌日，やはり対馬と福岡を結ぶ路線はストで運航中止となった。とにかく福岡まで戻ることにしたが，フェリーで博多港へ着いた時には東京行き最終便は飛び立ったあとである。とりあえず博多駅へ向かったものの，東京行きの新幹線も夜行列車も終了，この後どうするか考えていると，駅員が大阪行き新幹線に乗れば，広島で先行していた東京行きに乗り換えることができると調べてくれた。結局この案にのり新幹線で広島へ，夜行に乗り換え横浜へと，まるで西村京太郎ミステリーのトリックまがいの方法で帰ることになったのも，今となっては笑い話である。

まだまだ調査行の思い出は尽きないが，ここらで筆をおきたい。大場さんのご冥福をお祈りいたします。

追悼文

井の頭自然文化園　杉田 務

大場信義先生が 1 月 31 日にご逝去なさいました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

私が大場先生と初めてお会いしたのは，2008 年だったと思います。知人の紹介でソレイユの丘に訪問させていただきました。当時，私は多摩動物公園昆虫園飼育展示係に勤めていましたが，ホタルを担当していませんでした。そんな私にホタルの飼育方法と生息環境作りに取り組む姿勢を丁寧に教えてくれました。「ホタルに取り組むとどうしても，ホタルをたくさん飛ばそうとしてしまう。数にこだわってはだめだよ。ホタルが 1 匹だけ飛んでいる日があってもいい。ホタルが飛ばない年があってもいい。多様な生物が生息しているなら，ホタルはそこにいなくもいい。大切なのは楽しむことだよ。」ホタルをたくさん飛ばしてやろうと意気込んでいた私の心を見透かされていたのかもしれません。その後ホタルの担当になり，経験を重ねるごとに先生の言葉の重みが少しずつ理解できるようになりました。

多摩動物公園内でのホタルの生息環境作りでは，近隣地域に生息しているホタルの導入先の紹介をしていただきました。また，現場に足を運んでいただき環境作りのご指導いただきました。先生からは，「一度に全てに取り組むと環境が激変してしまう。環境作りは，生き物の様子を観察しながら少しずつ取り組むことが大事だよ。」と教えていただきました。この教えのおかげで，多摩動物公園では，毎年 6 月にホタルが光り飛び交うようになり，観察会も実施できるようになりました。多くのお客様にホタルの光の美しさをみせることができ，身近な自然の大切さを伝えることができたと思います。

先生や関係者の方を招いて観察会を実施した時のホタルは一番キレイに光り飛び交っていました。そんな中，先生にガイドをお願いすると「目の前で光り飛び交うホタルをみていた方が貴重だ。私の話を聞いている時間がもったいない」と言っていました。先生はホタルに敬意を払い，そして本当にホタルが好きな人だなと改めて思いました。

2017 年に台湾で開催された「国際ホタルシンポジウム」では，多くの時間を共有し，一緒にホタルを見ることができました。しかし，先生は体調が万全

ではありませんでした。そんな中でも，ホタルへの探求心が先生を突き動かしていたと思います。その探求心が，ホタル研究の第一人者として世界中に知れ渡り，海外の研究者が，先生に挨拶しに来ていました。その時，横にいた私は自己紹介で「私は大場先生の生徒です」と挨拶すると，皆がとても親切にしてくれました。先生はホタル・自然環境と人を繋ぐだけではなく，人と人も繋いでくれました。多くの素晴らしい出会いを与えてくださり感謝しています。

最後にお会いしたのは 2018 年でした。ホタルの飼育担当から別の担当になり，ご挨拶に行った時でした。「ありがとう。頑張ったね。今度，会うときはホタル談義に花を咲かせよう。」と声を掛けてくれました。

また先生に会いたかったです。先生は多忙だからと遠慮せずに会いに行けばよかったです。私は先生からホタルの飼育方法や環境作りを学び，そして何よりも人として未熟な私を成長させてくれました。今までいただいたご恩は，次世代へと「恩送り」していけるように精進していきます。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。

大場先生と YRP 光の丘水辺公園

水辺公園友の会 会長 別府 史朗

光の丘水辺公園は，1999 年４月に横須賀市の公園としてオープンしてから 22 年が経過しました。今では造成された公園とはわからないほどに自然が再生され，全国的に近年消失の著しい水辺環境を備えたたぐいまれな公園となっています。またこの水辺と森の緑が織りなす環境は，一般市民の安らぎとより深い自然志向者の欲求を満たす優れた公園として知られるところとなっています。

遡ると，1994 年に YRP 開発の環境影響評価書が提出され YRP 開発工事が着手されました。この光の丘水辺公園の整備には，YRP 開発で失われる自然を再生し後世に残していくという基本的な使命と目的に加え，都市公園として「一般市民への供用」という目的があり，この自然保護の観点からは相反する要求に応えるための調和的な設計，施工，そして管理が求められ，専門家を中心とした「YRP 水辺公園整備計画委員会」が設けられました。

この委員会は 1994 年 6 月 2 日から 1997 年 10 月 22 日まで合計 9 回実施され，大場先生はこの委員会の委員として，三浦半島自然保護の会会長の柴田敏隆先生（故），横須賀ホタルの会会長で水辺公園友の会の初代会長の（故）亀井公様他の委員とともに，全体基本設計と管理方式，特に聖なる池の細部の計画，施工方法や施工管理，トウキョウサンショウウオとホタルの飼育と放流，また将来の維持管理などについての専門的な検討や提言で大きな役割を果たされました。

公園オープン後はボランティア団体である水辺公園友の会のアドバイザーとして，水辺公園開発における経緯，谷戸の湿地の土を仮置きすることなくそのまま再生場所(聖なる池)に移すという初めての施工方法の特徴と狙いなど，公園についての全体の姿を教えていただきました。また自然再生や保全の考え方，管理目標の設定など全般的な指導もいただきました。

先生のご専門のホタルの再生に向けては，ゲンジボタルとヘイケボタルの孵化幼虫の提供，幼虫の飼育や放流の指導，カワニナの生息状況の確認，田んぼや水路の土や日照などの生息環境について色々アドバイスをいただきました。

2016 年度からはホタル幼虫の放流無しで毎年 2～4 頭の発光を継続確認できていますがホタルの再生とまでは至っておりません。先生の頭の中にはこうすればよい，ああすればよいなど多くのお考えをまだまだお持ちだったと思いますが，お聞きすることなく残念でなりません。「ホタルの生息環境としては良い。特に近年減少しつつあるヘイケボタルの生息に適した環境。」，「わからないときは自然に聞く。」とのお言葉を胸に，ホタルの乱舞を夢見てこれからも自然環境の再生・保全に取り組んでいきたいと思っています。
先生のご冥福をお祈りいたします。

先輩学芸員・大場さんの背中

横須賀市自然･人文博物館 昆虫担当学芸員 内舩 俊樹

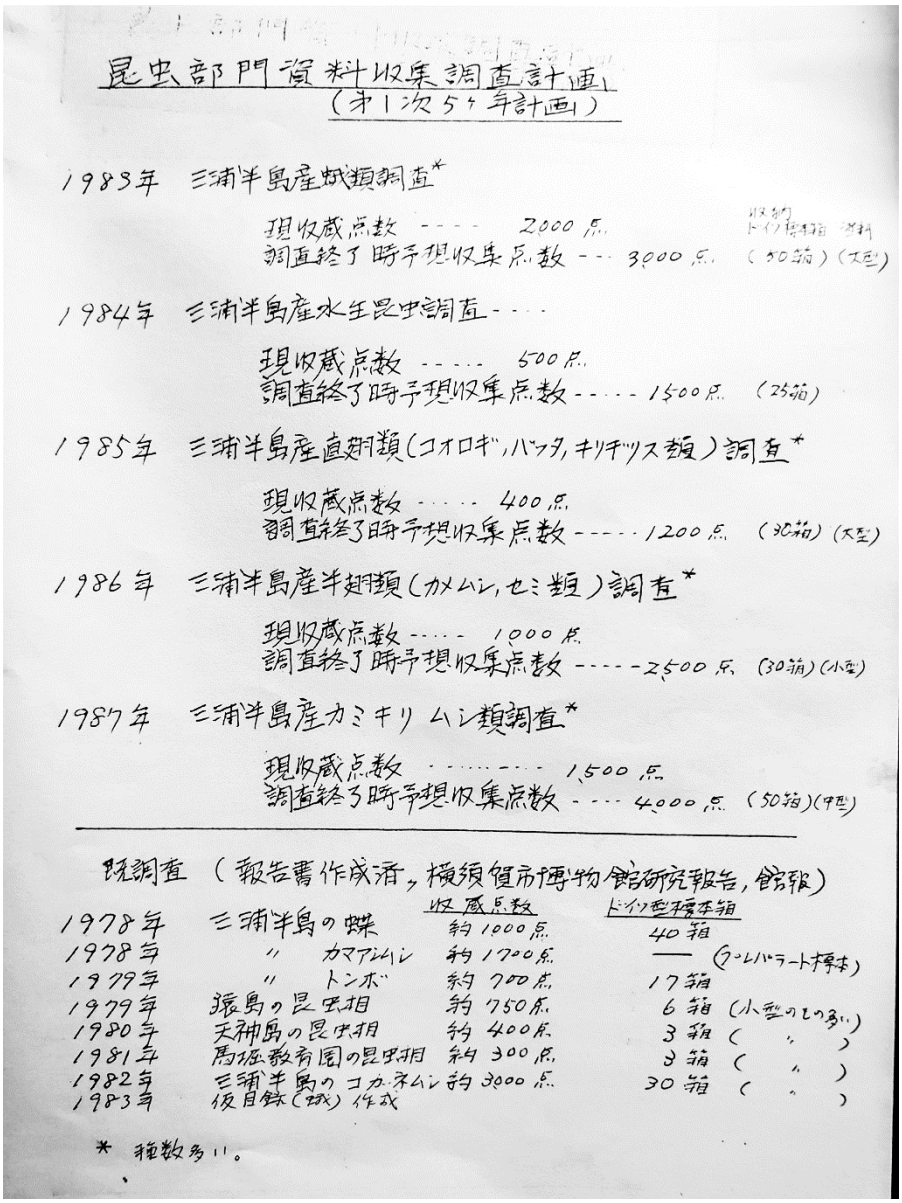
大場信義さんとの出会いは 2007 年，私が横須賀市自然・人文博物館に着任した時でした。大場さんの後任として昆虫担当学芸員にはなったものの，ホタ

ルについて理解が浅いばかりか，大場さんについてもお名前しか存じ上げませんでした。大場さんは 2006 年３月に当博物館を定年退職されましたが，退職後も 2011 年３月まで研究員として当博物館に在籍いただき，収蔵資料に関する引継ぎや展示教育事業のサポートなどにおいて直接ご指導いただく機会がありました。お会いした印象は，気さくで分かりやすく話をされる方で，ホタル研究や保全活動に関する話題になると，いちだんと熱がこもっていたことも思い出されます。

大場さんと一緒に仕事をさせていただいた中で思い出されることを，３つご紹介します。

一つめは，博物館収蔵の昆虫資料に関することです。当博物館に登録されている昆虫標本は現在約 4 万点，その登録台帳をさかのぼると「1976 年 2 月」とあり，最初の資料登録が 1975 年 4 月に学芸員に着任された大場さんによって始められたものであることが分かります。今や当博物館の昆虫資料の多くは，多くの方の寄贈による標本が占めるようになりました。しかし，学芸員着任当時の大場さんは，少しでも早い資料の充実を図るべく，着任後およそ 10 年間のうちに約 2 万点もの昆虫を収集し，その半数に上る登録を済ませています。ここまで膨大な収集・収蔵活動が，1983 年に Studies on the communication system of Japanese fireflies（当博物館研究報告［自然科学］30 号に掲載）で京都大学から理学博士の学位を授与されたホタル研究と並行して行われていたことを知り，大変な驚きを覚えました。そうした蓄積である標本が箱に分類され 20 基以上ものロッカーに収められているのですが，あるロッカーに貼られた紙に強い印象を受けました（写真 1）。「昆虫部門資料収集調査計画」と題した計画書には，これを三浦半島昆虫研究会（後述）とのプロジェクトとして行うため，分かりやすい数値目標とともに年次計画が記されています。私自身が市民協働での調査への思いを鼓舞したいとき，今でもときどきロッカーの扉に貼られたその紙を見るようにしています。

二つめの思い出は，大場さんが設立に関わって共に地域の昆虫研究を行ってきた，三浦半島昆虫研究会です。私が着任した当時は，大場さんと長年活動してきたメンバーの多くが在籍しており，彼らから大場さんとの思い出や業績をお聞きする機会が多かったことを思い出します。同会は，学芸員着任直後の大場さんと数名のアマチュアによる研究グループに，横浜市立六浦中



昆虫部門資料収集調査計画
（第1次5ヶ年計画）

1983年　三浦半島産蛾類調査*

現収蔵点数 ---- 2000点
調査終了時予想収集点数 --- 3000点　（50箱）（大型）

1984年　三浦半島産水生昆虫調査 ----

現収蔵点数 ----- 500点
調査終了時予想収集点数 ----- 1500点　（25箱）

1985年　三浦半島産直翅類（コオロギ，バッタ，キリギリス類）調査*

現収蔵点数 ----- 400点
調査終了時予想収集点数 ----- 1200点　（30箱）（大型）

1986年　三浦半島産半翅類（カメムシ，セミ類）調査*

現収蔵点数 ----- 1000点
調査終了時予想収集点数 ----- 2500点　（30箱）（小型）

1987年　三浦半島産カミキリムシ類調査*

現収蔵点数 ------ 1,500点
調査終了時予想収集点数 ---- 4000点　（50箱）（中型）

既調査（報告書作成済，横須賀市博物館研究報告，館報）

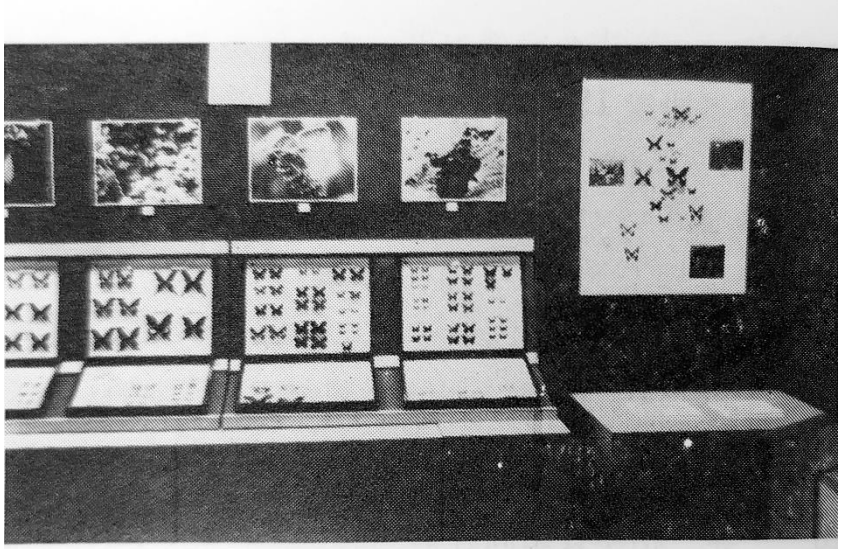
		収蔵点数	ドイツ型標本箱
1978年	三浦半島の蝶	約1000点	40箱
1978年	〃　カマアシムシ	約1700点	―― （フォルバラート標本）
1979年	〃　トンボ	約700点	17箱
1979年	猿島の昆虫相	約750点	6箱（小型のもの多い）
1980年	天神島の昆虫相	約400点	3箱（〃）
1981年	馬堀教育園の昆虫相	約300点	3箱（〃）
1982年	三浦半島のコカマムシ	約3000点	30箱（〃）
1983年	仮目録（蛾）作成		

* 種数多い。

写真1．ロッカーに貼られた計画書

学校生物部の OB グループが合流したことが創立のきっかけと聞いています。その OB グループを率いた顧問の故石渡裕之さんと大場さんとの親交は厚く，石渡さんが亡くなられた 2017 年に発行された同会会誌「かまくらちょう」92 号には，地域での活動を長年共にした石渡さんへの思いが綴られた，大場さんの追悼文が掲載されています。大場さんと三浦半島昆虫研究会との歩みを，私が同会とともに振り返った試みとして，2012 年に当博物館で開催した企画展

示「三浦半島のチョウ」（写真２下）があります。これは，大場さんと同会が最初の協働事業として行った「三浦半島の蝶」調査（写真１下部に記載あり）を元に 1984 年に開催された同名の特別展（写真２上）に対応した調査・展示活動です。世代交代しつつある同会会員とともに，四半世紀後の振り返りに１年半をかけ，その間に行われた打ち合わせには大場さんにも臨席いただき，私や新しい会員に対して，当時のチョウの様子や会の活動について語っていただいたことが思い出されます。



特別展「三浦半島の蝶」

写真２. 上は 1984 年度特別展「三浦半島の蝶」*,
下は 2012 年企画展「三浦半島のチョウ」

三つめの思い出は，ホタルに関する教育・研究活動です。前述のとおり，私の着任後も大場さんには研究員として博物館活動に関わっていただき，観察会や講演会の講師をたびたびお願いしては，私自身もお話を拝聴したものでした。当博物館付属の馬堀自然教育園で開催したホタル観察会での大場さんのお話は，ホタルそのものの生物学的な解説だけでなく，ホタルとヒトに関わる文化的な話，同教育園を軸に横須賀市内から全国・世界へ波及した水辺の再生・保全活動についての話に及びました。観察の対象だけでなく，関連する人間活動や自然環境に関わる話を織り交ぜることは，大場さんが各地で多くの住民による活動を後押しするため，聞き手の共感を引き出し，活動を望ましい方向へと導くため磨かれてきた技術なのだと感心しました。現在も続く当博物館のホタル観察会では，私なりにではありますが，大場さんのようなホタルにまつわる幅広い話をするようにしています。

以上，大場さんと仕事でご一緒した際の思い出の一部を紹介させていただきました。研究や外部団体との連携に関するエピソードも挙げましたが，そうした話題で大場さんは，前述したように熱が入るだけでなく，決まって「実（じつ）を取る」という言葉を繰り返し口にされていたことを思い出します。ホタルに関する多くの共同研究や全国各所での市民協働における成功の陰に，対立や葛藤を超える人知れぬ努力があったであろうことは，大場さんの域へはまだまだ道のりが長い私自身の学芸員活動に照らしても，容易に想像がつきます。大場さんの言葉は，つまずきながらも小さな実績を重ねることの大切さを後進の学芸員に説いたアドバイスとして，大切にしていきたいと思います。大場さん，ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

（＊ 横須賀市博物館報 No.32 より転載）

追悼号に寄せて

横須賀ほたるの会　三ヶ田 康造

あれは２月の中ごろ，大場先生の奥様から一通のメールが届きました。大場先生が亡くなって，一応のお葬式は終えた旨の連絡でした。

とりあえず，奥さまが落ち着かれる３月に入ってから数人で行くことといたしました。先生は小さな箱に入られて，もう二度と口を利かない身になっておりました。

思いおこせば，先生に初めてお目にかかったのは，娘が岩戸川のホタルを復活させるのに関わりたい，ということから様子を見に行ってのことでした。丁度ホタルの幼虫を離している最初の年であったと記憶しています。それから少しずつ会のほうに協力しながら，先生と一緒にやってきました。５年後に，もう出ないし今年出なければやめようか，という年に出始めて，あの年の嬉しさって言葉では言い表されませんでした。それから 30 年少し，人生の半分近くを先生と一緒に過ごしてきました。

今では,岩戸川も前会長の亀井さんのご尽力で 100 匹ほどではありますが，毎年飛んでくれて，大場先生も毎年ご覧になりに来てくれて，立派なカメラで写真を撮っておられました。

私たちの会では，毎年９月にその年のご苦労さん会を開催しております。当然，その会には先生も参加されます。宴もたけなわになったころ，各位の近況報告をするのですが，その報告の最後に先生の一年間の報告をして頂きます。ホタルは日本では３月から９月ごろまでしか飛びませんが，先生のご活躍はそれ以外にもすごく，日本中に限らず，世界中を駆け巡っています。もはや，世界の大場先生です。その大場先生が毎年の飲み会に参加していただいて，その活躍ぶりをお話しくださるのは聞く方としてはワクワク以外の何物でもありません。

私たちの会では，毎年あるところでホタル観察会を行っています。その会にも先生はお出でくださって，10 分ほどお話をしてくれました。毎年々々いろんな話をして頂き，会の者としてはこれ以上ない嬉しいお話を頂きました。もうこの話を聞くことはありません。残念でたまりません。

先生は，ホタルに関することでは西に東に駆け巡り，日本のホタルの第一人者としての自覚をもって活躍されていました。しかし，先生は普通の人間で，何隠すことなくホタルのことには前向きで，何でもやってみようという気持ちがお強い方でした。博物館をお辞めになられた後も，積極的に海外のグループのお誘いに足を向けたり，国内の出来事にも入り込んだりして，ホタルのために尽くしてこられました。本当の先生だと思います。

残念ながら，若くして亡くなってしまいましたが，残された人たちがちゃんとまっすぐに進むように，空から指導していただけるよう，よろしくお願い致します。

合掌

事務局からのお知らせ

春先からコロナウイルスの感染が拡大し，さらには緊急事態宣言が発出される事態となり，日本ホタルの会といたしましても，会議，イベント等の活動を自粛してまいりました。

2020 年度は，役員改選の年に当たっていますが，2 月の理事会ですでに現在の役員を再任することが決定していましたので，4 月 1 日付けで再任いたしました。新体制での会議が開始できていませんが，状況を判断しつつ適切に対応してまいりますので，任期２年間につきまして，よろしくお願いいたします。

一方，イベントの開催については，結果的に，ホタル観察会を見送らざるを得ない状況となりました。情報の発信が十分にできなかったことを，お詫び申し上げます。

その後，５月 25 日に緊急事態宣言は解除となりましたが，これまでの日常が戻るにはまだ時間がかかると思っています。こうした中でシンポジウム等を例年どおり行うことの可否についても判断できていません。今しばらく状況を見つつ，しかるべき時期に判断し，当会ホームページ上で告知して参りたいと考えています。その間もニュースレターの発行は継続してまいります。また，日本ホタルの会ホームページや http://www.tokyo-hotaru.com/ には，当会関係者が撮影したホタルの写真や動画が掲載されていますので，ご覧いただけ

れば幸いです。今後もこうした形での発信を進めていきたいと思いますので，引き続きご理解とご協力を賜りますよう，よろしくお願いいたします。

会費未納の取り扱いについて（事務局からのお願い）

日本ホタルでは，会員の皆様から会費を納入いただき，各種イベントの開催，ニュースレターの発行，ホームページの運営等の活動を行っています。みなさまには，毎年会費の納入をお願いしているところですが，２年続いて未納の状態となりますと，次の年度当初から各種イベントの案内やニュースレターの送付等を停止させていただいております。ご承知おきいただくとともに，会費の納入にご協力を賜れば幸いです。

なお，ニュースレター等がお手元に届かなくなった時にお申し出いただければ，未納分をお支払い頂いた上で，送付を再開させていただきますので，申し添えます。

日本ホタルの会は，会員のみなさまに支えられ活動を継続しております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

＊＊

日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

ホタルのニュースレター（第86号）
2020年 7月12日発行
編集　日本ホタルの会事務局
発行　本多　和彦
〒239-0824　神奈川県横須賀市西浦賀4-11-2-404
本多方（日本ホタルの会事務局）

e-mail：0723398601@jcom.home.ne.jp
URL：https://www.nihon-hotaru.com
Facebook: https://m.facebook.com/nihonhotaru/
印刷　青森コロニー印刷　　東京都中野区江原町２－６－２